インターネット上における自己開示¹

——自己-他者の匿名性の観点からの検討——

佐藤広英² 吉田富二雄 筑波大学

Self-disclosure on the Internet: The effects of anonymity of the self and the other

Hirotsune Sato and Fujio Yoshida (University of Tsukuba)

The effects of anonymity on self-disclosure were investigated in a CMC (computer-mediated communication) situation by separately manipulating the anonymity of the self and the other. It was hypothesized that anonymity of the self would enhance disclosure, whereas anonymity of the other would decrease it. Female undergraduate students ($n = 60$) were randomly assigned to a 2 (self: anonymous or non-anonymous) $\times$ 2 (other: anonymous or non-anonymous) experimental design. The anonymity of the self and the other was manipulated in the profile, such as the photo, name, and sex of the self or the other, on the computer screen. The results indicated that anonymity of the self decreased the feeling of anxiety, but had no effect on disclosure, whereas anonymity of the other decreased the feeling of closeness and decreased the intimacy of disclosure.

Key words: Internet, self-disclosure, anonymity of the self, anonymity of the other.

The Japanese Journal of Psychology

2008, Vol. 78, No. 6, pp. 559-566

従来より、インターネットを介したコミュニケーション (computer-mediated communication: 以下, CMC とする) では、対面場面 (face to face: 以下, FTF とする) よりも自己開示が促進されると報告されている。例えば、医療場面に関する研究では、患者はコンピュータを用いた診察の方が対面式の診察よりも自らの症状を正確に包み隠しなく報告することが示されている (Ferriter, 1993; Greist, Klein, & Van Cura, 1973)。また、医療場面以外でも、Parks & Floyd (1996) は、Usenet 参加者を対象とした調査を行い、参加者のオンライン上の他者に対する自己開示の程度を尋ねた。その結果、参加者の約 6 割がオンライン上では高いレベルの自己開示を行っている と回答した。さらに、CMC において自己開示が促進されることは、実験室場面でも示されている (Coleman, Paternite, & Sherman, 1999; 遠藤・吉田・安念, 1998; Joinson, 2001)。例えば、Joinson (2001) は、ジレンマ状況に関する討議

課題を用いて、CMC 条件と FTF 条件における自己開示量を比較した。その結果、CMC 条件では FTF 条件よりも有意に多くの自己開示 (自分の情報を含む発言) がみられた。また、遠藤他 (1998) は、CMC における自己開示と親密化過程について、時系列的な変化を検討している。その結果、CMC では関係の初期から深い自己開示が行われており、それが親密化に促進的に作用することが示された。一方で、選択的ジレンマ課題 (Kogan & Wallach, 1964) を用いた Kiesler, Zubrow, Moses, & Geller (1985) の研究のように、CMC 条件と FTF 条件の間で自己開示に差がみられない研究もわずかであるがみられる。

従来のインターネット上の自己開示に関する実験研究に関して四つの問題点が指摘できる。第一に、匿名性に関する実験設定の問題が指摘できる。匿名性は CMC の重要な概念として多くの CMC 研究で扱われているが、匿名性の定義や操作方法は一貫していない。例えば、Siegel, Dubrovsky, Kiesler, & McGuire (1986) や Adrianson (2001) は、匿名性を“お互いの名前がわかるかどうか”として扱っており、会話中のメッセージにお互いの本名を付与するかどうかで匿名性を操作している。一方、Lea & Spears (1991) や Joinson (2001) では、匿名性を“視覚的匿名性 (お互いの顔が見えるかどうか)”として扱っており、同じ部屋でお互いの顔が見えるか、異なる部屋でお互い

Correspondence concerning this article should be sent to: Hirotsune Sato, Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tennnodai, Tsukuba 305-8572, Japan (e-mail: hirotsune@human.tsukuba.ac.jp)

¹ 本研究は筑波大学 21 世紀 COE プログラム拠点“こころを解明する感性科学の推進”の研究一部として実施された。また、本論文の一部は日本社会心理学会第 47 回大会において発表された。

² 本研究の実施にあたり、筑波大学人間学類の高橋沙矢香さんにご協力頂きました。心より感謝いたします。

の顔が見えないか、あるいは Web カメラでお互いのビデオ映像を映すかどうかで匿名性を操作している。このように匿名性の定義は多様であり、また、匿名性を“お互いの匿名性”として扱っている。しかし、匿名性をより厳密にみると、“自己の匿名性（自分が相手に識別されるかどうか）”と“他者の匿名性（相手を識別できるかどうか）”の二側面に分類することができる。実際に Lea, Spears, & deGroot (2001) は自己と他者の匿名性の区別が必要であると述べ、それぞれに異なる影響を持つ可能性を指摘している。例えば、自己は匿名の方が自己開示が促進されるが、他者に関しては匿名であるよりも誰であるかわかる方が自己開示が促進されるといった可能性も考えられる。このように、匿名性を自己-他者の二側面から捉えることで、匿名性の効果をより詳細に検討することができるだろう。

第二に、従来より、CMC の特徴を明らかにするに当たって、主に FTF との比較から論じられている点が挙げられる。CMC と FTF では、“匿名性（お互いの顔や様子がわかるかどうか）”と“会話様式（文字によるコミュニケーションか、声によるコミュニケーションか）”の二つの次元で大きく異なる。そのため、CMC において自己開示が促進されるとしても、それが匿名性の効果によるものなのか、会話様式の効果によるものなのかが明確ではない。同様の問題点から、白石・遠藤・吉田 (2002) は、CMC における集団極化現象を検討する際、CMC 条件と FTF 条件に加えて、FTF 条件の参加者の間に衝立を立てて相手に関する視覚情報を削除した仕切り条件を作成し、匿名性と会話様式の効果を分離した。その結果、仕切り条件では CMC 条件と FTF 条件の中間程度の極化がみられた。ただし、白石他 (2002) の研究では討議中の自己開示については扱っていない。したがって、CMC における匿名性が自己開示に及ぼす効果を検討する際、会話様式の効果を分離した設定を用いる必要があるだろう。

続いて三点目の問題点として、自己開示の測定方法と実験課題の問題が挙げられる。自己開示には量的側面のみならず深さを表す質的側面があるとされるが (Altman & Taylor, 1973)、従来の研究では会話記録から自己開示を含む発言数や文字数をカウントするという手法を用いており、量的側面の検討だけに留まっている。そのため、自己開示の質的な側面についてはあまり検討されていない。また、従来の研究では主にジレンマ課題などの討議課題が実験課題として用いられている。例えば、Joinson (2001) では、“5 人だけ入れる 100%安全な核シェルターがあります。自分自身と家族、友人以外で、核戦争が起きたとき、世界中でどの 5 人をシェルターに入れるべきだと思いますか？”というテーマについて二者で討議する課題を用

いている。しかし、このような討議課題は自己に言及する場面ではないため、自己開示が行われにくい可能性が考えられる (Joinson, 2001)。したがって、より自己開示が行われやすい実験課題を用いる必要があるだろう。

そして最後の問題点として、CMC において自己開示が促進されるとしても、どのような要因が作用しているかが明らかではない点が挙げられる。この点に関して、Altman & Taylor (1973) の社会的浸透理論によると、相手との関係性が自己開示の量や深さに関わる重要な要因とされている。CMC における相手との関係性について、Walther (1996) は匿名的な CMC では相手との親密な社会的相互作用が促進され、その結果、過度に親密感をもたらすと報告しており、これを“超個人的コミュニケーション”と名付けている。また、遠藤他 (1998) は、CMC 場面ではリラックスでき、抵抗感が緩和されることから相互に深い自己開示が可能であると述べている。このことから、匿名的な CMC では、相手への親密感を高め、また、相互作用中の不安感を低減させることで、自己開示が促進されると予想できる。では、匿名性を自己-他者の二側面からみたとき、どのような結果が予測できるだろうか。自己の匿名性に関しては、Walther (1996) や遠藤他 (1998) の議論より、自分が匿名であることで相互作用中の不安感や緊張感が減少し、また相手との親密な相互作用が可能となるため、自己開示が促進されると予想できる。一方、他者の匿名性に関しては、相手の正体がわからないことにより不安感が高まり、また、未知の相手に対しては親密感を感じにくくなるため、自己開示が抑制されると予想できる。

以上の問題点を基に、本研究では、CMC における匿名性を相互作用を行う二者間の関係性に限定して捉える。そして、“自己の匿名性（自分が相互作用の相手に識別されるかどうか）”と“他者の匿名性（相互作用の相手を識別できるかどうか）”の二側面から捉え、それぞれが自己開示に及ぼす効果について検討を行う。その際、会話様式の効果を分離するため、CMC と FTF の比較ではなく、実験設定を CMC（文字による会話状況）に限定し、CMC 上で匿名性を操作する。また、実験課題として、従来用いられてきた討議課題ではなく、より自己開示を行いやすいと予想される面接場面を設定する。自己開示の測定については、開示内容がどの程度内面的かといった自己開示の質的側面に注目し、第三者による評価および自己報告の二側面から測定を行う。また、遠藤 (1995) によると、開示内容が内面的であると感じているほど、それを出表する際には強い抵抗感を伴うとされる。すなわち、開示することへの抵抗感もまた自己開示の質的な指標として重要と考えられるため、開示抵抗感についても併せて測定する。そして最後に、“相互作用中の

不安感の低減”や“相手に対する親密感”がCMCにおける自己開示を促進すると予想し、その過程を予備的に検討する。その際、以下の仮説が予想される。

仮説1 自己が匿名なとき、非匿名なときに比べ、(a)相互作用における不安感は減少し、(b)親密感が高まるだろう。それ故、(c)自分自身のことを話すのに抵抗感を感じにくく、(d)内面的な自己開示が促進されるだろう。

仮説2 他者（相手）が匿名なとき、非匿名なときに比べ、(a)相互作用における不安感が高まり、(b)相手に親密感を感じにくいだろう。それ故、(c)自分自身のことを話すのに抵抗感を感じやすく、(d)内面的な自己開示は抑制されるだろう。

方 法

実験計画

自己の匿名性（匿名または非匿名）と他者の匿名性（匿名または非匿名）を要因とする2要因実験参加者間計画であった。

実験参加者

女子大学生60名³を各条件に15名ずつ無作為に配置した。

匿名性の操作

参加者が別室で待機する面接者とチャットを介して面接を行う際、両者の画面中に自分、相手の顔写真や

³ 参加者および面接者の性別の影響を排除するため、本研究では、自己開示度が高く、抵抗感を感じやすいとされる（Jourard, 1964）女子大学生のみを対象とした。

基本情報が呈示されるかどうかによって自己-他者の匿名性の操作を行った（Figure 1）。

自己の匿名性の操作 自己非匿名条件では、最初にWebカメラにより顔写真を撮影し、顔写真を画面上に表示した後、“名前”、“性別”、“所属”、“学年（年齢）”、“サークル名”を参加者自身にキーボードで入力させた。一方、自己匿名条件では、“Bさん”という仮名だけを記入させた。

他者の匿名性の操作 他者非匿名条件では、面接者の“顔写真”、“名前”、“性別”、“所属”、“学年（年齢）”、“研究テーマ”の情報を呈示した。一方、他者匿名条件では、“Aさん”という仮名だけが画面上に呈示された。

実験装置

画像・プロフィールをその場で作成・呈示するためのCGIプログラムを独自に作成した（Figure 1）。また、プロフィール用の顔写真の撮影にはWebカメラ（ロジクール社製“Qcam@Pro4000”）を用いた。

面接者

心理学を専攻する女子大学生2名を面接者の役割に当てた。面接態度や話し方については予め十分な訓練を行った。

手続き

参加者が実験室に入室後、以下の教示を行った。“本実験はインターネットを介した面接の特徴を検討するためのものであり、これからあなたには別の部屋

⁴ 他者非匿名条件では、面接者間でプロフィールを統一するため、架空のプロフィールを使用した。

Figure 1. 自己匿名×他者匿名条件の実験画面(左上：参加者、右上：面接者、下部：チャット画面)

にいる面接者の役割の方と模擬面接を行っていただきます。研究データは、個人が特定できない形で扱い、また、研究への参加は自由意思で決めることができ、途中で中止することもできます”。

次に、面接で使用する参加者のプロフィールの作成を行った。自己非匿名条件では、顔写真の撮影およびそれを一時的に公開することへの許可を得た上で顔写真を撮影し、その他の項目を参加者自身に入力させた。一方、自己匿名条件では名前の欄に“Bさん”と入力させた。終了後、面接者のプロフィールが参加者自身のプロフィールの右横に呈示され、さらに、両者のプロフィールがお互いのコンピュータ上に映るようになっていく旨を説明した。

続いてチャットの利用方法の説明および練習を行った後、面接の説明として以下の教示を行った。“これから臨床分野で面接の訓練を受けている方と模擬面接を行っていただきます。面接のテーマや進め方は全て面接者の方に指示してありますので、あなたは話してもいいと思う範囲で質問に答えてください。なお、答えた内容からあなたの深層心理を分析するなどの目的はございません”。

そして、面接中の会話記録を保存することへの許可をとり、面接を開始した。面接の時間は 50 分程度を目安とした ($M=49.34$ 分, $SD=4.31$)。面接終了後、質問紙への回答を求め、最後にデブリーフィングを行い、実験は終了した。

面接の話題

前半に表面的で話しやすい話題 2 題 (a) 休日の過ごし方, (b) 今までで経験した楽しかったこと、そして後半に内面的で話しにくい話題 2 題 (c) 自分の好きなところや長所、嫌いなところや短所, (d) 今持っている悩みや問題、を配置し、この順番で面接を行った。

自己開示の測定

第三者による評定と自己報告の二つの方法により測定した。

他者評定 心理学を専攻し、臨床相談の経験のある大学院の学生 2 名 (女子) が、全ての会話記録 (ログ記録) を読み、評定を行った。評定では、全体的な印象として、(a) 開示内容がどの程度内面的であるか (表面的—内面的)、(b) 参加者が自分のことを話すのにどの程度抵抗感を感じているか (感じていた—感じていない)、についてそれぞれ 1 項目 7 件法で評定を求めた。さらに、面接前半と後半それぞれの自己開示について各 3 項目 (“自分の深い部分まで話している”, “本音で話している”, “感情的な部分を出している”), “まったく当てはまらない—非常に当てはまる” の 7 件法で評定を求めた。

自己報告 面接後の質問紙において、面接前半と後

半の自己開示各 6 項目 (“深い部分まで話をしている” など)、面接中の抵抗感 1 項目 (“面接の間、自分のことを話すのに抵抗感を感じていた”) について、“まったく当てはまらない—非常に当てはまる” の 7 件法でそれぞれ回答を求めた。また、会話中の不安感 (“面接中不安だった” など 4 項目)、親密感 (“面接者に親しみを感じた” など 4 項目) についても同様に 7 件法で回答を求めた。

結 果

他者評定

面接前半と後半の自己開示については、評定者ごとに 3 項目の平均値を算出した。そして、全ての指標について 2 名の平均値を算出し、それぞれ (a) 開示の内面性得点, (b) 抵抗感得点, (c) 自己開示得点 (前半), (d) 自己開示得点 (後半) とした。なお、評定者間には、全て 1% 水準で有意な相関がみられた (内面性: $r=.32$, 抵抗感: $r=.34$, 開示前半: $r=.41$, 開示後半: $r=.47$)。各指標の条件ごとの平均値を Figure 2, Table 1 に示した。各指標について、自己の匿名性および他者の匿名性を要因とする 2 要因分散分析を行った。その結果、(a) 開示の内面性得点では、他者の匿名性の主効果にのみ有意差がみられた ($F(1, 56) = 4.79, p < .05$)。すなわち、相手が匿名なとき ($M = 4.17$)、非匿名なときに比べて ($M = 4.65$)、開示の内面性は有意に低かった。(b) 抵抗感得点、および (c) 自己開示得点 (前半) では、主効果交互作用共にみられなかった。(d) 自己開示得点 (後半) では、他者の匿名性の主効果にのみ有意差がみられた ($F(1, 56) = 4.13, p < .05$)。すなわち、面接後半では、相手が匿名なとき ($M = 4.68$)、非匿名なとき ($M = 4.97$) に比べて、自己開示が有意に抑制されていた。

自己報告

面接前半と後半の自己開示について、それぞれ主成分分析により一次元性を確認した後 (負荷量が全て

Figure 2. 開示の内面性得点 (他者評定) の平均値 (レンジは 1—7 点)

Table 1
各測度の条件ごとの平均値(標準偏差)

自己の匿名性		匿名		非匿名	
他者の匿名性		匿名	非匿名	匿名	非匿名
1. 他者評定					
自己開示	前半	4.56 (.51)	4.66 (.47)	4.43 (.52)	4.67 (.41)
	後半	4.79 (.64)	4.91 (.48)	4.58 (.51) ^{a)}	5.02 (.51) ^{b)}
抵抗感		3.03 (.83)	2.90 (.71)	3.13 (.63)	2.83 (.70)
2. 自己報告					
自己開示	前半	3.64 (.97)	4.19 (.94)	3.83 (1.06)	4.23 (1.00)
	後半	4.60 (1.27)	4.86 (.67)	4.61 (1.06)	4.97 (1.09)
抵抗感		2.87 (1.25)	2.47 (1.27)	2.80 (1.32)	2.57 (.94)
不安感		2.15 (1.01) ^{a)}	2.35 (1.17)	2.90 (1.39) ^{b)}	2.67 (1.15)
親密感		4.40 (1.16)	4.91 (.75)	4.77 (.97)	5.07 (.50)

注) レンジは全て1—7点。対比較(Bonferroni法)の結果, ^{a)}と^{b)}の間に傾向差($p < .10$)がみられた。

.40以上), 平均値をもって(a)自己開示得点(前半)($\alpha = .70$), (b)自己開示得点(後半)($\alpha = .83$)とした。抵抗感については, 1項目の得点をもって(c)抵抗感得点とした。また, 不安感と親密感についても主成分分析により次元性を確認した後, それぞれ4項目の平均値をもって(d)不安感得点($\alpha = .85$), (e)親密感得点($\alpha = .82$)とした。各指標の条件ごとの平均値をTable 1に示した。各指標について自己の匿名性および他者の匿名性を要因とする2要因分散分析を行った。その結果, (a)自己開示得点(前半)では, 他者の匿名性の主効果のみに傾向差がみられ($F(1, 56) = 3.41, p < .10$), 相手が匿名なとき($M = 3.74$), 非匿名なときよりも($M = 4.21$), 自己開示は抑制される傾向を示した。一方, (b)自己開示得点(後半), および(c)抵抗感得点については, 主効果交互作用共にみられなかった。次に, (d)不安感得点では, 自己の匿名性の主効果のみに傾向差がみられ($F(1, 56) = 3.02, p < .10$), 自分が匿名なとき($M = 2.25$), 非匿名なときよりも($M = 2.78$), 相互作用中に不安を感じにくい傾向が示された。(e)親密感得点では, 他者の匿名性の主効果のみに傾向差がみられ($F(1, 55) = 3.12, p < .10$), 相手が匿名なとき($M = 4.58$), 非匿名なときよりも($M = 4.99$)相手に親密感を感じにくい傾向が示された。

自己開示測度間の関係

自己報告による自己開示得点(前半, 後半), 抵抗感得点と, 他者評定による開示の内面性得点, 抵抗感得点との間の相関係数を算出した。その結果, 自己報告による自己開示得点(前半, 後半)は, 他者評定による開示の内面性得点との間に有意な正の相関(前半: $r = .31, p < .05$, 後半: $r = .52, p < .01$), 他者評定による抵抗感得点との間に有意な負の相関(前半:

$r = -.34, p < .01$, 後半: $r = -.44, p < .01$)がみられた。一方, 自己報告による抵抗感得点は, 他者評定による開示の内面性得点との間に有意傾向で負の相関($r = -.24, p < .10$)がみられたが, 他者評定による抵抗感得点との間の相関は有意に至らなかった($r = .16, ns$)。また, 前半後半ごとに自己報告の自己開示得点と他者評定の自己開示得点の相関係数を算出した結果, 前半後半それぞれに有意な正の相関がみられた(前半: $r = .44, p < .01$, 後半: $r = .57, p < .01$)。

パス解析

自己-他者の匿名性が不安感や親密感を媒介して面接中の自己開示に影響を及ぼすという予測について, パス解析により検討を行った。パス解析は, 第1水準を自己-他者の匿名性, 第2水準を不安感および親密感, 第3水準を面接全体の自己開示の程度の指標である他者評定による開示の内面性および自己報告による抵抗感⁵, とする流れを想定し, 各水準より上位にある変数を説明変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)を繰り返し行う方法を用いた。なお, 第1水準である自己-他者の匿名性については, それぞれ非匿名条件を0, 匿名条件を1と設定し, 分析に用いた。分析は, 第1段階として, 第1水準の変数から第2水準の変数への重回帰分析を行い, 第2段階として, 第1, 第2水準の変数から第3水準への重回帰分析を行った。分析結果をFigure 3に示した。Figure 3にみられるように, 自己の匿名性は, 相互作用中の不安感を

⁵ 開示に伴う抵抗感の主観的な感覚であるため, パス解析では自己報告の指標を用いた。なお, 他者評定による抵抗感を用いてパス解析を行った結果, 抵抗感に対して, 不安感からの有意傾向の正のパス($\beta = .24, p < .10$), 親密感からの有意な負のパス($\beta = -.26, p < .05$)がみられ($R^2 = .16, p < .01$), 自己報告の結果とは同様であった。

低減させる傾向を示し、それが開示抵抗感の低減へとつながっていた。一方、他者の匿名性は、相手に対する親密感を減少させる傾向を示し、それが内面的な開示の抑制や開示抵抗感の増加へとつながっていた。しかし、不安感や親密感の R^2 値は低く（共に $R^2 = .05$, $p < .10$ ）、その媒介効果は弱いものであった。また、他者の匿名性から開示の内面性への直接効果もみられ、他者が匿名であること自体も内面的な開示を抑制していた。

考 察

本研究では、従来より“お互いの匿名性”として扱われてきた相互作用における匿名性を“自己の匿名性”と“他者の匿名性”に分離し、それぞれが自己開示に及ぼす効果を検討した。自己の匿名性は相互作用中の不安感を低減させる傾向を示したが（Table 1）、親密感、抵抗感および自己開示に対する効果はみられなかった。このことから、仮説 1(a)は支持される方向を示したが、仮説 1(b), 1(c), 1(d)は支持されなかった。一方、他者の匿名性は相手に対する親密感を低減させる傾向を示し（Table 1）、開示の内面性を抑制していた（Figure 2）。また、他者評定では、面接後半において他者の匿名性が自己開示を抑制していたのに対し、自己報告では、面接前半において他者の匿名性が自己開示を抑制する傾向を示した。しかし、不安感、抵抗感に関しては他者の匿名性の効果はみられなかった。このことから、仮説 2(b), 2(d)は支持される方向を示したが、2(a), 2(c)は支持されなかった。また、パス解析の結果、自己の匿名性は相互作用中の不安感を低減させる傾向を示し、それが開示抵抗感の低減へとつながっていた。一方、他者の匿名性は、相手に対する親密感を減少させる傾向を示し、それが開示抵抗感の増加、内面的な開示の抑制へとつながっていた（Figure 3）。しかし、不安感や親密感の R^2 値は低く、媒介効果は弱いものであった。さらに、他者が匿名であることが直接的に内面的な開示を抑制するという効果もみられた。以上のことから、CMC における自己の匿名性と他者の匿名性は、自己開示に

対してそれぞれ異なる効果を持っており、匿名性を二側面に分離することの必要性が示されたといえるだろう。以下の考察では、まず自己の匿名性の効果について、続いて他者の匿名性の効果について論議する。

自己の匿名性の効果

本研究の結果、自己の匿名性は不安感を低減させる傾向を示した。この結果は遠藤他（1998）の報告と一致し、自己が匿名な状況では個人が特定されるのではないかという不安がなく、安心して、またリラックスして相互作用を行うことが可能であることを示している。一方、分散分析の結果、自己の匿名性が開示への抵抗感および自己開示に及ぼす効果は、他者評定と自己報告共にみられなかった。また、パス解析の結果、自己の匿名性による不安感の低減が、開示抵抗感の減少へとつながる可能性が示された。ただし、 R^2 値は低く、媒介効果が弱いことが指摘される。では、なぜ本研究において自己の匿名性の効果はみられなかったのか。一つ目の原因として、参加者と面接者の関係性の問題が挙げられる。今回の実験では、参加者は、初めて出会った面接者と 1 度限りの短時間の会話を行った。しかし、そのような初めて出会った相手に対して、自分自身の悩みや問題などの深い自己開示することは極めて難しいものと考えられる。また、実際のインターネット上をみると、お互いに相手が誰であるかを知らなくても、同じ悩みや問題を共有する者同士が集まっており、互いに信頼し合うことで、深い自己開示が行われる場合が考えられる。それに対して、本研究では、共通の悩みや問題を持つ状況ではなく、面接を行う側と受ける側という役割として実験に参加しているため、相手に深い信頼感を抱くことは難しいと考えられる。ただし、お互いに共通の悩みや問題を抱え、かつ会話を複数回に分けて繰り返して相手との関係性が進展するならば、より深い自己開示が行われやすいと予想される。そして、そのときに自己の匿名性の効果はより強くみられるのではないかと考えられる。さらに、Weisband & Kiesler (1996) によると、コンピュータ利用が自己開示に及ぼす効果はデリケー

Figure 3. パス解析の結果 ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

トな内容の自己開示を扱うときほど強くなり、特に精神科や内科の病院患者を対象としたときに強い効果を持つことを報告している。すなわち、一般人に言えないような悩みや問題を抱えた参加者を対象としたとき、匿名性の効果は強力になると考えられる。こうした観点から本研究の実験対象である大学生をみたとき、持っている悩みや問題の程度は、病院患者などと比較して軽いものであったと予想される。このような参加者の場合、役割として実験に参加しかつ短い時間の中で、自己の内面的な悩みや問題を表出するのは極めて困難であると考えられる。

二つ目の原因として、実験設定の問題が挙げられる。本研究では匿名性を相互作用の相手に対する匿名性として実験的に操作した。しかし、大学内での実験であるため、話の内容によっては相手に特定されてしまう恐れがあり、その結果、自己開示が抑制されてしまった可能性が考えられる。また、会話記録を実験者にみられることに懸念を持った可能性も考えられる。たとえ自己が相互作用の相手に対して匿名な状況であったとしても、実験者に会話記録をみられることが自己開示を抑制させてしまった可能性も考えられる。

他者の匿名性の効果

本研究の結果、他者の匿名性は相手に対する親密感を減少させる傾向が示された。これは、顔も名前もわからない相手に対して親密感を抱くことが難しいからであると考えられる。Zajonc (1968) の単純接触仮説では、同じ顔写真を繰り返して見るほど、その人物に対する好意度が高まるとされる。つまり、他者非匿名条件において、会話の進行に加えて相手の顔写真などの情報が呈示され続けることで、その人物に対する親密感が徐々に高まっていったと考えられる。そして、その親密感の高まりが、参加者の開示抵抗感を減少させ、内面的な自己開示を促進したと予想される。逆にいえば、会話の進行にも関わらず、他者の匿名性が親密感を抱きにくくさせ、その結果、自己開示を抑制するということであり、この過程は、実際にパス解析の結果からも示唆される (Figure 3)。しかし、パス解析における親密感の R^2 値は小さく、媒介効果はわずかなものであった。本研究は実験データであり、参加者数が少なく、相関分析には限界があると考えられる。したがって、本研究における媒介過程の検討は、あくまで仮説的な検討に過ぎず、今後より詳細に検討する必要があるだろう。一方、パス解析の結果では、他者の匿名性が直接自己開示を抑制していた。逆にいえば、相手をわかることが自己開示を促進していた。これは、相手から自己開示を受けたときに同等の自己開示を返報しようとする動機、すなわち自己開示の返報性 (Jourard, 1959) が生じた可能性が考えられる。本研究では相手の顔写真や名前などの情報を画面上に

呈示するかどうかにより匿名性を操作しているが、この情報自体が相手の自己開示として作用し、それに返報する形で参加者の自己開示が促進されたと考えられる。

また、他者評定の結果、相手がわかることによる自己開示の促進は深く内面的な話題に関する面接後半においてのみ、みられた。Altman & Taylor (1973) によると、初対面の相手に対しては浅く表面的な話題が選択され、親密な相手に対しては深く内面的な話題が選択される。したがって、浅く表面的な話題は、他者が匿名かどうかに関わらず開示できるが、深い内面的な話題は、相手がわかり親密感を感じる状況において開示が促進されることが考えられる。それに対して、自己報告では、他者評定とは逆に、面接前半において他者の匿名性が自己開示を抑制する傾向を示していた。これは、他者評定と自己報告の評定方法の違いによるものと考えられる。匿名な相手との相互作用は、日常ではあまり経験することがないため、特に面接開始当初には、非常に困難さを感じるだろう。自己報告の場合、そのような主観的な困難さが非常に意識されやすく、回答として表れたものと考えられる。一方、他者評定では、第三者が会話記録のみを基に評定するため、そのような主観的な困難さは反映されにくいと考えられる。しかし、自己報告では、他者の匿名性の効果は傾向に留まり、有意には至らなかった。この原因として、自己報告における個人差の問題が考えられる。他者評定では、面接を行った経験のある2名の評定者が、参加者の自己開示の程度を同一の基準に基づいて評定するのに対し、自己報告では、参加者がそれぞれ自己開示の程度を評定するため、評定の際の基準が個人ごとに異なっていた。そのため、分散分析において、自己報告の評定の基準の違いが個人差として誤差項に入り、誤差分散の値が大きくなったため、他者の匿名性の効果は有意に至らなかったと考えられる。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、インターネット上の自己の匿名性および他者の匿名性が自己開示に及ぼす効果について検討した結果、それぞれに異なる効果を明らかにした。しかし、実際のインターネット上にみられる完全な匿名性を実験室実験において再現することは難しく、限界があるだろう。また、本研究におけるパス解析による媒介過程の検討についても、参加者数の問題から仮説的な検討に留まっている。以上の点を踏まえ、今後は、実験室実験だけではなく、インターネット上における自己開示行動について、インターネット利用者を対象とした Web 調査を行うことによって、本研究の結果を検証していく必要があると考えられる。

引用文献

- Adrianson, L. (2001). Gender and computer-mediated communication: Group processes in problem solving. *Computers in Human Behavior*, **17**, 71-94.
- Altman, I., & Taylor, D. (1973). *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- Coleman, L. H., Paternite, C. E., & Sherman, R. C. (1999). A reexamination of deindividuation in synchronous computer-mediated communication. *Computers in Human Behavior*, **15**, 51-65.
- 遠藤公久 (1995). 自己開示における抵抗感の構造カウンセリング研究, **28**, 47-57.
- (Endo, K. (1995). The structure of hesitation in self-disclosure. *Japanese Journal of Counseling Science*, **28**, 47-57.)
- 遠藤公久・吉田富二雄・安念保昌 (1998). コンピュータコミュニケーションにおける親密化過程 日本心理学会第 62 回大会発表論文集, 133.
- (Endo, K., Yoshida, F., & Annen, Y.)
- Ferriter, M. (1993). Computer aided interviewing and the psychiatric social history. *Social Work and Social Sciences Review*, **4**, 255-263.
- Greist, J. H., Klein, M. H., & Van Cura, L. J. (1973). A computer interview by psychiatric patient target symptoms. *Archives of General Psychiatry*, **29**, 247-253.
- Joinson, A. N. (2001). Self-disclosure in computer-mediated communication: The role of self-awareness and visual anonymity. *European Journal of Social Psychology*, **31**, 177-192.
- Jourard, S. M. (1959). Self-disclosure and other-cathexis. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **59**, 428-431.
- Jourard, S. M. (1964). *The transparent self*. New York: D. Van Nostrand.
- Kiesler, S., Zubrow, D., Moses, A., & Geller, V. (1985). Affect in computer-mediated communication: An experiment in synchronous terminal-to-terminal discussion. *Human-Computer Interaction*, **1**, 77-104.
- Kogan, N., & Wallach, M. A. (1964). *Risk taking. A study in cognition and personality*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Lea, M., & Spears, R. (1991). Computer-mediated communication, de-individuation and group decision-making. *International Journal of Man-Machine Studies*, **34**, 283-301.
- Lea, M., Spears, R., & deGroot, D. (2001). Knowing me, knowing you: Anonymity effects on social identity processes within groups. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 526-537.
- Parks, M. R., & Floyd, K. (1996). Making friends in cyberspace. *Journal of Communication*, **46**, 80-97.
- 白石 崇・遠藤公久・吉田富二雄 (2002). コンピュータネットワーク上における意思決定——集団成極化効果を用いて—— 心理学研究, **73**, 352-357.
- (Shiraishi, T., Endo, K., & Yoshida, F. (2002). Computer mediated discussion and attitude polarization. *Japanese Journal of Psychology*, **73**, 352-357.)
- Siegel, J., Dubrovsky, V., Kiesler, S., & McGuire, T. (1986). Group processes in computer-mediated communication. *Organizational Behaviour and Human Decision Processes*, **37**, 157-187.
- Walther, J. B. (1996). Computer-mediated communication: Impersonal, interpersonal, and hyperpersonal interaction. *Communication Research*, **23**, 3-43.
- Weisband, S., & Kiesler, S. (1996). Self-disclosure on computer forms: Meta-analysis and implications. Proceedings of CHI96, <http://www.sigchi.org/ch96/proceedings/papers/Weisband/sw_txt.htm> (September 19, 2006)
- Zajonc, R. B. (1968). Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology Monograph Supplement*, **9**, 1-27.

——2006. 9. 22 受稿, 2007. 9. 1 受理——